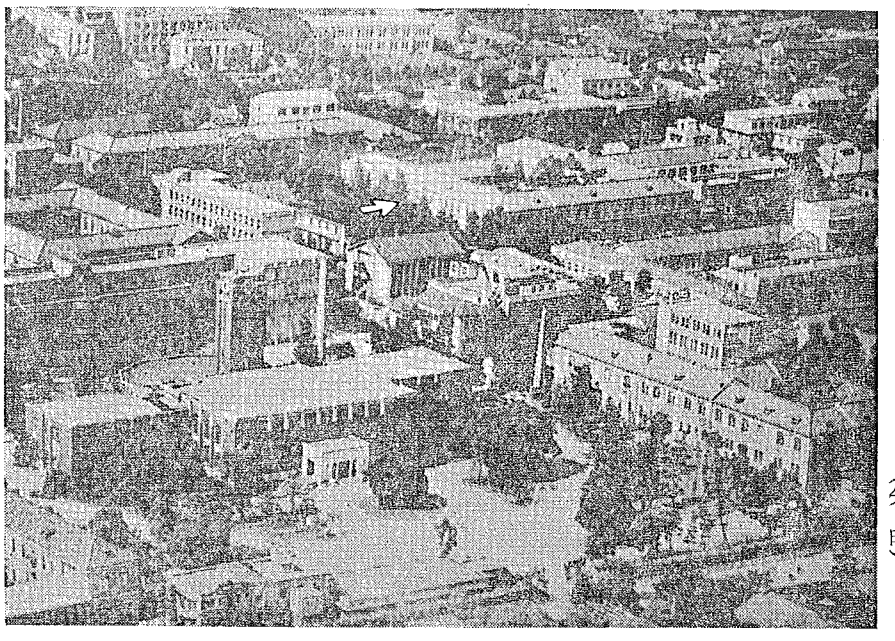
洛友会報

京都市左京區吉田
京都大学工学部
電気科教室内
洛友会



空から見た電気教室（矢印）

大阪毎日新聞撮影

育成の心構え

会を組織するのは、誠に、茶飯事のようだ。何々会、何々会と指を屈するのに暇がない有様だ。

そして会を作るに当つては、その熱意は激しい。然し、一旦出来上ると熱意は冷めて、路傍の人のようになつて仕舞ふ。

一旦、大多数の者が、賛成して出来た会に対しては、不賛成であつた者も、これに協力するのが社会通念である。

かやうにして出来上つた会を如何にして育成するかと言うことには、会員の大多数が無関心である。

日本とある外国との国際会が設立されたことがある。そのときに会費の問題が先づ日本側で討議された。

日本人は、入会するときに会則に従うと宣言している。入会して仕舞うと会費の滞納が多い。会を運営する基本は会費であるのに、中々納めない。

外国人は必ず会費を納める。さうなると、役員会で、外国側から日本側へ、何故会費を日本人は滞納するかと理由を聞かれては返事が出来ないし日本側の恥となる……と言うわけで、定期の会費は取らず、有志の據金で会を運営することになつたことがあつた。

飜つて考えて見ると、これは会員が、会を育成して行こうという心構えがないからである。

然らば、育成する心構えの根底は何かというと「会費を納める」ことである。それからは進んで会の世話をする。会報に投稿する。更に進んでは会の基金を寄附する等々である

会を運営するに最低の必要条件は六十五パーセントから七十パーセントの会員が会費を納めることである

我々は、スパークの如く一時的の華がさでなく、電熱線の如くねばり強く発熱して、洛友会を育成して行こうではないか。

廻し文

卒業年一九〇八年
YAMATA KOITI.

僕等一九〇五年電気科に入学した者十七人であつた。この内九人は故人となり今は八人生存している。

今から五年前廻し文と云うのを初めた。これは八人の間を駅伝式に順次廻はす手紙で自分の家へ廻つて来たら、前回自分が書いた物を取り去り新たな記事を加えて次へ送るのです。一ヶ年に四回位廻つて来る。

既に十八回目となつた。御互の消息は元より、逸話、穴探し、すつぱ抜き等他人には云えないこと等も遠慮なく書けるのが特別で楽しいものです。皆さんに御勸め致します。

林重憲教授
ガソリンを嚥む

鳥養先生が「せんざい」を求めに遙々河内の国までお出かけになつた頃、林先生は待望のビールにありついて勢いよく一杯を乾したまではよかつたが、次の二杯目にこれは少々味が違うわいと、よくよく見れば豈はからんやガソリンであつた。その頃はガソリンも貴重品でビール瓶に詰めて丁重に一緒に置いてあつたものを飲みたい一念であわてて息もつがずに呑まれたらしい。

さあ大変、これで一命をなくするようなことがあつては、奥様や子達に申訳の立たないことは勿論、折角多年の研究も無駄になるのかと、悄然と病院に駈け込まれました。

早速副院長と看護婦で胃の洗滌にとりかゝつたのですが、ゴム管を喉まで入れるとボーンと落ちてそれ以上挿入されない。じれつたいこと夥しい。兎に角する内に院長が帰つて来て馴れた手つきでゴム管を入れようとするがこれまた駄目である。実に隔靴掻痒の思いである。

林先生は気が気でない。然しそこは学究であるだけに、ガソリンが人体に及ぼす影響についての文献はないかと懸命に要求されると、院長はウエブスターの大辞典のような毒物学の書を持ち出し、眼鏡をはずして丹念に調べた結果、ガソリンの項を見出し声高々に読み上げられたのは「ガソリンを少量飲めは健胃剤となり、多量を嚥下すれば腹痛を起し吐瀉す」と。

（この文句は未だに先生は一言一句も間違へずに記憶されていること程左様に偃けんであつた）

ここにおいて林先生は漸やく生気をとりもどし、もう大丈夫だと席を改めて今度は本当のビールを飲まんとすれど、ガソリンのゲップが出てとても飲む気もせずすごすごと帰宅されました。

するとガソリンは排泄物として一瀉千里の勢で出てしまいましたが、あと一週間程はガソリンのゲップでなやまされたそうであります。

そこで若い同窓生諸君に申し上げます。慌ててビールと間違へてガソリンを一杯息もつがずに呑んでも命には別条のないことは、林先生のむつかしい交流理論のレクチュアでなくて、一命を賭けられたテストデータであることを。

（老書生）

教室での思い出

明三七　多田耕象

私共の学生時代は半世紀昔のこと

第一回定時總会開催通知

定時総会を左記の通り開催いたしますから万障お繰り合せ御出席下さいますよう此段御通知申し上げます

記

日時　十一月十五日（日）午前九時

場所　京都大学工学部会議室

順序

一、会長挨拶

二、前年度事務並に会計報告

三、講演　時事問題

講師（交渉中）

四、記念写眞撮影

五、懇親会（晴雨不論）

高雄および清滝探勝

午前十時発貸切バスにて高雄へ、観楓

高雄より清滝川に沿い清滝へ、徒歩約三十分

清滝　桝屋（電話嵯峨一三五番）にて昼食

午後三時半、貸切バスにて四条大宮へ

午後四時、同所で解散の予定

六、懇親会費　四〇〇円

懇親会に御出席の方は同封振替用紙にてお払い込み下さい。これをもつて御出席通知に代へます

尚準備の都合がありますので当日のお申込みには応じかねる場合がありますから御承知置き下さい

七、申込み期限　十月末日

洛友会

故のんびりして世智辛くない時代でした、数例を掲げて証明します。

○京都出身同級生兩君に「君達は嵐山のコクゾウさんで十三詣りした故学科が良く出来るのは当然だ」とからかう悪口屋もいました。

○私は比叡登山狂で春秋など月平均二回以上も登りました。或るとき小倉先生から次の月曜に電気磁気の試験をすると予告を受け、土曜午後から俄勉強を始めたがどうも気分が進まず、夕方から空が曇つて来たので翌日曜は雨天に間違いなしと判断して早寝した処、翌朝は絶好の晴天、比叡に登らざるを得ないのです、疲れて帰つてまた早寝、月曜の試験成績不良であつたのは勿論です。

○卒業間際になつても「せめて資本金十万円以上の会社で働きたいな」と言う者はあつたが、就職口について先輩を訪ねたり心配したりする者は一人もありませんでした。

（電力中央研究所長）

☆　☆　☆

大二　建部貞二

私達の学生時代には電気教室は赤煉瓦一階四角型の建物で中央に芝地の庭があり其処に無線のアンテナポールがありこの周囲に毎年卒業生が牡丹を植えて記念とせられた、毎年花の盛りに牡丹会を開き先生先輩と学生が愉快な一日を送るのでした。

私達の年には空地がなくなつたので藤棚をつくることとし別に花を見るための腰掛を考えたのですが、松風碍子さんで碍子型の腰掛を作つてもらうよう頼みに行きましたが予算の点で困り種々と考えて七万V級高ピン碍子の耐圧試験で不合格となつたものを分けてもらい校庭に運び芝生に据附けました。この碍子は高圧実験用の台に流用されていたのを見ましたが教室の增築でこの庭がなくなつたときからどうなりましたか。

實習の思い出

一、実習先

二、実習中面白かつたこと、印象深かつたこと等

大三　鎌居大藏

一、日立製作所

二、イ、変圧器鉄損測定　配電電圧の電源に水抵抗器を入れて電圧を加減して変圧器鉄損を諸電圧に対して測定した、電流波形の歪による不思議な結果が出て解釋に努めたこと

ロ、実習が就職の縁となつて終に日立実習を一生やつて、工場長の実習もしてやつと六十才で社会に出た始末です。

（日東電氣工業KK社長）

☆　☆　☆

大十二　今田英作

一、高岳製作所　奥村電気

二、大学二年のとき名古屋の高岳製作所に実習させて貰い変圧器の設計の仕方を当時の佐々木技師長に教はつて大変面白く感じました。

三年のときは京都の奥村電気に実習をさして貰い鋳物を作らせてもらつたら、これは無難でしたが、オッシログラフを使つて試験をするとき大切なオッシログラフを過大電流で焼いて大変恐縮したことを今でも冷汗をもつて思い出します。

（京阪電鉄事務）

クラス會便り

昭七クラス會　七月二十八日

○今晩は永田君の歓迎級会で元機関大佐松井登兵君のキモイリで大盛会、在京クラスも段々人数が少くなり、頭は段々薄くなつて来るを覚ゆ　（田村）

○東京へ転勤以来三ケ月、本夕久方振りに同窓諸兄と会談、愉快な一夕を送る、在京在阪の諸兄に宜しく　（永田）

○京都が懐しいですね、クラスを代表して大いに頑張つて下さい　（吉岡俊男）

○頭が薄くなつた筆頭として遥かに健康を祈る　（浅井生）

○元気で働け　（松井登兵）

前田憲一殿　井上勲夫殿

あなた方のクラス會は？

大正一三　本多靜雄

本年は卒業後三十年の会合が、電々公社関係で、十二、十三年合同でやる計画があります。

大内誠三、幸前治一などのメンバーが揃つて、にぎやかだと思います

昭和一五　北爪隆夫

我々の年度のものは、学校を卒業して、夫々会社に就職し落着く暇もないうちに入営、応召したものが大部分で、終戦後も、お互の消息も明かでないまま現在に及んでいる状態でクラス会などもあまり開かれていない。私自身も二十三年にシベリヤより復員するまで一切クラスメートの消息も判らないし、交通等も出来ない有様であつた。

幸に阪大に板倉氏が助教授としていられるので、同氏の世話で、大阪附近在住のものが七八名程度集つたことが二度ばかりあるのみである。

世情も大分安定したことでもあるし、名簿等も、もつと整理して、クラス会も定期的に開くように持つて行きたいと考えている。

昭和一八　河原勇

我々昭和十八年組では別にクラス会の名前というようなものはつけていませんが、京阪神地方の在住のものでは、大体年に二回クラス会をやつています。幹事は順番に二名位づつ受持ち、場所及期日は当番になつたものが選定することにしております。今度は卒業一〇周年に当るので、今秋の会合は多少なりと盛大にやる予定で、委員六名ばかり選出して案を考えています。卒業一〇年後のクラス会員の動靜を記念して、各自の家庭全員の写眞を同級生の数だけ寄せ集めてアルバムを作ることも企画しています。平素の連絡は教室に残つている近藤、池上助教授のもとに取れますので至極便利です。

電氣評論の今昔

松田長三郎

青柳先生の創設せられた、云わば教室の外廓団体に、電気評論（大正二年一月創刊）電気工学講習所（大正二年十月開講、現在の立命館大学工学部の前身）および青柳研究所（大正七年創立、現応用科学研究所、理事長鳥養先生）がある。何事でも云うは易く、実行は困難であるが、これ等の教育、研究、発表の三つの機関を創設せられた青柳先生の慧眼と実行力、又これに全幅の協力を惜まれなかつた諸先生に対して感謝と敬仰の念を禁じ得ない。

電気評論は創刊以来茲に四十一年になるが、その間、編輯に経営に、相当の変遷を辿つて来たが、その権威は高く評価せられ、聊か電気工学、工業界に貢献し得たことを喜んでいる。創刊当時は我国学界、技術界は尚輸入時代で、学会も電気学会だけしか無かつたような比較的幼稚な時代であつたが、本誌の研究初め多彩な記事は異彩を放つていた。

評論の一つの危期は昭和十八年、戦時中の国家的要請の下に、刊行物の整理統合の弾要せられた時であつたが、幸にして伝統ある本誌の歴史と権威が認められ、学会雑誌以外ではたしか一般向きとしてのオーム、専門雑誌としての本誌だけが存続することになった。安堵の胸を撫でおろした次第であつた。当時廃刊の悲運に遭つた歴史の古い「電気の友」がその形で未だに復刊されないことは誠に惜しいことであり、又それだけ時代の進運に即応する雑誌刊行の六つかしさが窺われた。

我が教室が権威ある自分の発表機関を有していることは大きな誇りであると共に、本誌のような寧ろ難解と評せられる学術雑誌が四十一年の長きに亘つて続刊せられて来たことは稀有のことである。

楽屋話しをして甚だ恐縮であるが本誌の月刊には月々多額の印刷費がかかる。これの自給自足は容易なことではなく、加えて士族の商法で、遅れ勝ちになつていることは申訳無い次第であるが、今後は研究業績発表の外、綜合報告的記事をも加えて品格あり親しまれもする学術雑誌として一層充実して行きたいと念願している。従来も卒業生各位が、広告等の面に於ても、多大の援助を惜まれなかつたことに対しては満腔の謝意を表する次第であるが、今後とも本誌が支障なく続刊出来るよう、購読に、広告に一層の御支援下さるようお願いする。事らその運営をお引き受けしている関係上、この誌上を借りて、教室教官一同に代り潜越ながら、広く卒業生各位に訴え、且つお願いする次第である。

賛助会員（その二）

石川島重工業株式会社
関西電力株式会社
昭和電線株式会社
住友電気工業株式会社
東京電力株式会社
日本電気株式会社
日本電池株式会社
古河電気工業株式会社
藤倉電線株式会社
大阪変壓器株式会社
株式会社　大林組
鹿島建設株式会社
九州電力株式会社
清水建設株式会社
大日電線株式会社
飛島土木建設株式会社
日新電機株式会社
日本電線株式会社
株式会社　宮木電機製作所
株式会社　安川電機製作所
東北電力株式会社
株式会社　井上電機製作所
石川島芝浦タービン株式会社
株式会社　関電製作所
近畿日本鉄道株式会社
近畿電気工事株式会社
工藤電気株式会社
京阪神急行電鉄株式会社
京阪電気鉄道株式会社
高周波熱錬株式会社
酒井建設株式会社
四国電力株式会社
新日本電気株式会社
株式会社　島津製作所
大同信号株式会社
中国電力株式会社
株式会社東京電気工務所
日本碍子株式会社
日本工営株式会社
日本高周波鋼業株式会社
阪神電気鉄道株式会社
株式会社福島電機製作所
富士通信機製造株式会社
株式会社　星野組
北海道電力株式会社
株式会社　村田製作所

洛友會々費領收

（七月一日より八月三十一日まで）到着の分

明三七　中川　惠郎　吉田　二郎
三九　国友　末藏
四〇　初見　五郎
四一　山田　鉉一
四三　梅田　雄三　赤坂　久三
四四　佐藤　雅
大二　大島　昊　野村　淨
建部　貞二　春名　道喜
三　村野　貞朗　室　馨造
田中　稔
四　石黒　九一　松尾　正男
石沢　四郎　荒井源三郎
中川銀三郎
五　七里　義雄
六　辻　秀男　辻　忠夫
山村　忠行　松田長三郎
七　岡添　柳吉　山西　清信
工藤　寿男　魚住　朝治
高阪釜三郎　阿部　清
宮崎佐加枝　小田部　毅
加藤　信義
八　神保　成吉　村田　義人
九　島田　実
一〇　樋口　貞三　佐伯光太郎
沼倉　三郎
一一　山崎　貫三
一二　羽村二喜男　幸前　治一
荒井　武治　藤田　誠治
今田　英作　村瀬　邦朋
一三　芦原　義重　梶谷葛亀次
菊池　保夫　永井徐二郎
岐美　忠雄　高田太三郎
一四　弓削　正人　藤田伊八郎
木津　圭藏
一五　林　芳樹　前田　安道
瀬川為三郎　宮田　秀介
小宮　義和　片山　辰雄
昭二　堀田　多雄　小寺　昇
桑畑二四夫　神先藤五郎
橋本篤四郎　栗本　順三
宮地　冬樹
三　村岡　正吉　木村　章介
三砂　延治　青木精太郎
福山　勉　富村　精雄
村田　昇
四　山県　敏夫　蒲生　守義
村上　功　平野　克巳
中村　良雄　高橋　親雄
谷口　正夫
五　小菅　菊夫　朝山　宗一
福井　佐市　吉留　実
平田　憲一
六　大西　正一　大谷宗太郎
伊藤　俊夫　安藤　弘平
野際　幸雄　吉田　洪二
足立　斌　長安　実
七　竹内　貞美　笠原　芳郎
前田　憲一　国本　貞三
井上　勅夫
八　西村　完三　田中　信孝
喜田村善一　阪本　勇
九　小倉　祐三　河村　泰雄
川村　孝三　川島　一夫
小原　誠　川田　勝稔
野口　一　仁田　工吉
岩井　鎌一　森島　五郎
一〇　北村　芳雄　天野　宗明
一一　中山　健一　清水　治郎
毛利　平登　加来誠一郎
鈴木　重次
一二　武夫　安田振之助
一三　秋田　武夫　吉川　德夫
上条清一郎　田中　幸男
山本　健　小林　四郎
大谷　泰之
絹笠　隆三
古賀　七郎　北瓜　隆夫
松尾　清隆　中村　利雄
一四　岡本　弘　安東侃一郎
一五　嘉田　隆美　須藤　二郎
大内田敏行　森津政太郎
中山　治郎
一六　山根　三郎　船橋　禮藏
一七　植本陽一郎　広田　通
一八　高木　敬三　吉住永三郎
近藤　文治
川合　深　大鳥羽幸太郎
一九　大槻善三郎　内山　政亮
川北　良之　伊藤　美暢
二〇　八隅　久明　矢田　純朗
塚本　龍雄　志村　勲
二一　吉田　潔
二二　小泉　広　大塚　成吉
岩崎　英男　橋本　幸成
藤川　清市　伊藤　隆
重永　実　馬原　熙夫
坂元　宣義　塚本　徹
二三　神　尚通　清水　照久
二四　岡田　栄　佐野　喜藏
二五　戸川　一義　奥村　徹
吉屋　幸彦　小川　平助
村尾　博　寿栄松憲昭
二六　大畑　昭一　野中　広
今井　芳通　津田　和巳
二七　室賀　弘　田口　可也
林　宗明　中村　弘康
渡辺　義郎
坂和　愛幸

▽グッドチャンス△

来る十一月十五日に洛友会総会が開催せらるゝ事は別記の通りです。そして懇親会が午後四時にすみますので、それからクラス会を計画したら時間的に助かり又、一層愉快な事と思います。

秋更けた京の一夕に、思い出を胸ふくらましてクラス会を催すのは、嬉しい極みです。

是非、クラス会を計画して、その愉快な模様を、この会報で発表して下さい。

▽原稿について△

会報への原稿は、一行十六字に願います。行数に制限はありません。第三号の締切は十月三十一日迄。

▽名　簿△

九月に配布の予定でしたが印刷の都合で本月になりました。立派な名簿です。御期待下さい。（本部）

▽鐵　塔　第一号△

昭和二十六年卒業の人達が、クラス会誌「鉄塔」を発行された。目次を拝見すると、巻頭言。教室より。隨想。文藻。あの頃。アンケート。等。横十七センチ、縦二十四センチもの六十七頁といふ堂々たるものである。是非、永続して益々発展せらるゝ事を祈る。

【附記】この種のクラス会誌を出して居らるゝクラスの方は一部を編集部宛お送り下さい。

△編集後記▽

○編集するものの唯一の楽しみと嬉しさは、会員から集る原稿である。その期待している原稿が、てんで来ないとなるとガッカリして仕舞う。編集者が月給を貰つているならば、それは仕事だから苦痛にもなるまいが、我々の場合は、会員であつて進んで編集の仕事に当つているので苦悩の種となる。

○苦悩の種とは？　原稿が集まらねば編集者が書けばよいのだが、それは特定人の会報になつて仕舞う。会員ばかりの手になつた原稿で埋められてこそ、同窓会の会報である。

○第二号に掲載しようと思つて、教室の思い出、実習、クラス会について約三十名の方に御願いした処、御覽の通りの方々だけ御返事を頂いたのであつた。

○とかく任意の会合だけに、無関心でいられる会員が多いのは、あながち洛友会ばかりでなく、何れの会合でも、同じ悩みを持つている。

○どうか、よりよい同窓会報とするため、一筆の労を執られるよう御願いする。

○洛陽は正に秋たけなはならんとしている。懐しい三年の思い出に、胸迫るものがあると察する。言はざれば腹ふくるる心地ぞするとか云う。一筆をものして安全弁の原稿を期待すること切なるものがある。

○窓外の青空を眺めると雲一つないのが物足りない風情な程に、秋が来ていた。燈火親しんで筆を執るに好季節。重ねて投稿を御願いする。

（老僧）